平成27年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に係る実践研究報告書

高知市立愛宕中学校
教諭　寺尾　順子

1　研究の成果と課題をふまえた平成28年度の実践内容

（1）大学院における研究の成果と課題

鳴門教育大学院修士課程言語コース（英語）では、“A Study on Speaking Instruction to Improve Improvisation and Fluency for Japanese Junior High School EFL Learners”というテーマでスピーキング活動について研究をした。この研究では、中学校段階における真の意味でのコミュニケーション能力（パターン練習や暗唱ではないよりリアルな対話や発話）の育成を行うために、即興性と流暢さに焦点を当ててそれらを向上させるための話す活動について枠組みを考えた。とくにスピーキングの帯活動が即興性と流暢さを向上させるのに有効であると考え、実験的授業を5時間連続して行った。成果としては、①帯活動は話すことの抵抗感を低くし表現に慣れさせていくためにも有効である。②即興性に関してはトピックを複数用意して生徒に選択させることで即興の場面を作ることができる。③流暢さに関してはまず会話を継続させることが肝心であるがそれには繰り返しやリアクションするための定型表現を使うことなどで不必要な間を空けないようにする。そしてさらに生徒が会話を広げていきやすいように、答える時に複数の答えで応答するなどしていくことが有効であることがわかった。課題としては会話を成立させるための土台づくりとして①語彙と構文の定着、②スピーキング活動時の支援の方法③Teacher Talkの充実、④タイムマネジメント、⑤家庭学習と話すことの関連、⑥話すことへの意欲づけであった。

（2）平成28年度の実践内容

本年度は2年生を2クラス担当した。所属校においては新たに「探究的な授業づくりのための教育課程の研究実践事業」という指定研究が始まり思考を深めるために思考ツールやICTを活用しての研究をすることになったのでそれらも活用しながら「帯活動としてのスピーキング活動」を実践してきた。さらに仲間の英作文に対してコメントを書いたり、スピーチの後に質問や感想を言ったりする活動も適宜取り入れ、即興の場面を作るよう心がけてきた。また英語教室で生徒一人ひとりの机の中にいつも英和・和英の小辞典と和英中辞典を入れておくことで学習環境を整えた。

① 授業のスタンダード（基本の流れ）

挨拶 → 会話（ペア）→ノート（会話したことを思い出して書く。）→本時の展開→まとめ
→課題の確認（音読　授業用ノートづくり　英作文　練習ノートなど）

② 帯活動としての会話

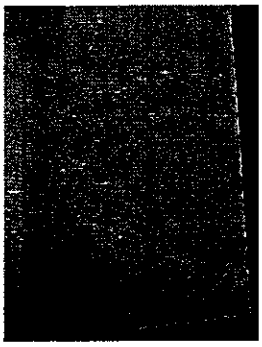
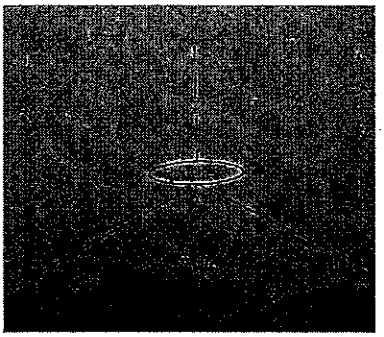
形態	学習班の中のペア（隣の席、斜め、前後）
時間	挨拶とTeacher Talkが終わった直後　（ALTとのTTの時はモデル会話）
内容 方法	二人で与えられた話題について会話をする。終わるとノートの右のページに「表現」として会話を書く。（書くことで定着させる。）

	1週間もしくは2週間程度を1つのクールとする。(最初は会話のモデル文を前に提示する。徐々に視覚支援を外していく。) 会話はあいづちを入れたり、質問をしたりするなど会話の基本形を提示しながら徐々にやりとりが増えるように仕組んでいった。
話題	生徒にとって身近なもの、複数用意して生徒に選択させる。 好きなもの(食べ物、スポーツ、芸能人、国など) (自己決定感:内発的動機付けのため)

③具体例　ア　実際の会話(ノートから)

A: Hi.	B: Hi.
Let's talk about animals.	
My favorite animal is cheetahs.	Oh, really? Why?
It's cool.	I see. My favorite animal is rabbit.
Why?	It looks so cute!

イ　会話を書いたノート　　ウ　思考ツール(会話を継続させるため)　エ　思考ツール(書く活動のための考え)

2　平成28年度の実践の成果と課題

(1) 成果

生徒は最初は、会話のパターンを見ながら会話をしていたが、同じ構文で毎回トピックを少し変化させることで構文に慣れてしっかりとペアと向き合って会話をすることが出来だした。また、話した内容を英語で書くという作業はハードルが高いが、完璧に書かなくもよいこと、途中までででも書くことに意義があること(自分で分かっていることとそうでないことを認識できる)を話して継続していった結果、会話が終わったら静かにどんどんとモデル文を見ずに会話文を書くことが出来るまでになった。書くことが出来る英文の量も多くなってきている。さらに生徒は自分が言えなかった表現を自ら辞書で調べて書いている。このように帯活動として会話をしてノートにすぐ書くという一連の活動は定着した。また仲間と楽しく英語で会話を続けようとすることが出来ている。

(2)　課題

会話の中で、あいづちを適切に使うこと、理由を述べる際に簡単な形容詞を含む文は使えるがより論理的な複雑な文はまだ使いこなせていないので、会話の内容(質)のレベルを上げるための表現を入れていき豊かな表現をさせていくことが課題である。